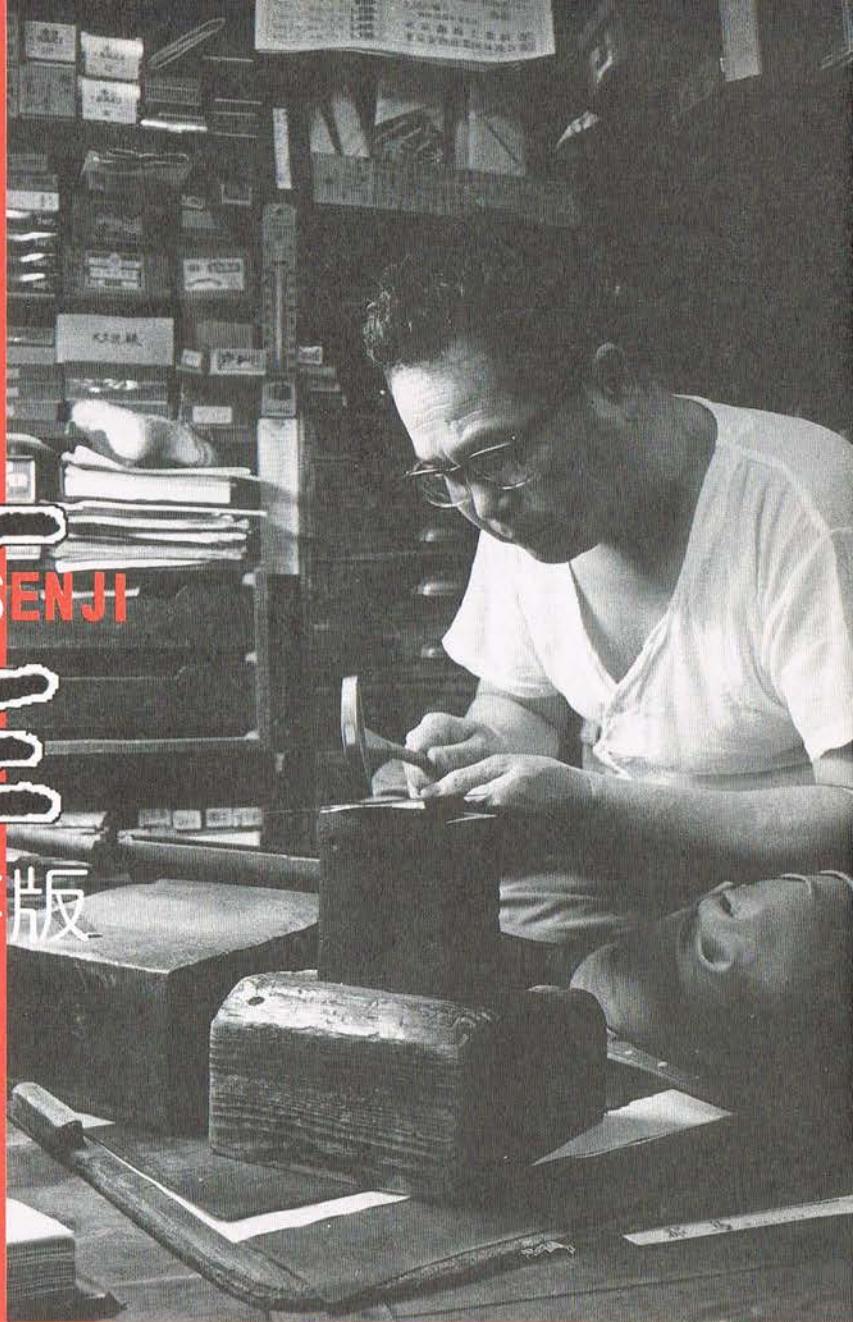


町雑誌

千住

SENJI

保存版



●特集● 千住・手仕事—職人ーの世界 PART1
●連載● 千住蔵の町
千住発見

特別価格二百円

VOL.8

MachiZasshi Senju

目 次

特 集 千住・手仕事—職人—の世界

江戸刺繍師 刺繍師の手業が引き出す綿糸の輝き

江戸刺繍師 江戸刺繍の美しさを次世代に
刺繍師 若乃花の土俵入りは千住の針が支える

紋章上総師 日本だけに残る「遊び心」の伝統文化

仕立て職 着る人のからだを思い描き、ひと針ひと針仕立てる

経師（表具師） 超一流の仕事人が語る「経師はどうももしろい仕事はない」

建具職 腕を磨き、道具を洗練させて生まれる技と粋

畠職 納まりのよさは「寸法具合」に始まる

絵馬職 東京にたた一軒の手書き絵馬屋、たた一人の女絵馬職

馬具職 宮内庁の馬具も一手に。心やさしい職人気質

ノコギリ自立て職 まず見立て、それから自立てるノコギリの“医者”的実力

ヤスリ自立て職 生涯現役 全国のプロが信頼するヤスリの達人

鍛打ち職 職人の手が語る、手のしこと

お願いなど

裏表紙

28

26

24

22

20

18

17

16

14

12

10

8

6

4

2

●特集● 職 人 パート1

ものをつくる人たちのネットワークはすごい。
千住の職人さんを取材して回ってみた実感だ。

建設職人の和田さん、畠職人の花井さんの名前を聞いたのを皮切りに、
仕事を通じ、あるいは趣味や酒を通じてつながっていることを知り、
この世界の深い魅力を感じた。

建設職人の小野さんから、畠職人の花井さん達が、互いに、
一匹狼の腕のいい職人さん達が、互いに、
仕事を通じ、あるいは趣味や酒を通じてつながっていることを知り、
この世界の深い魅力を感じた。

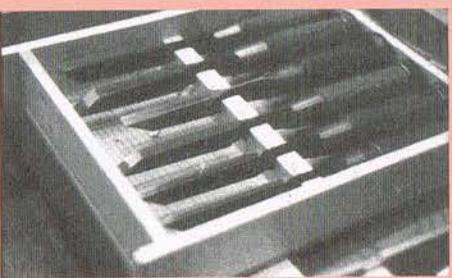
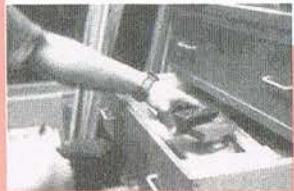
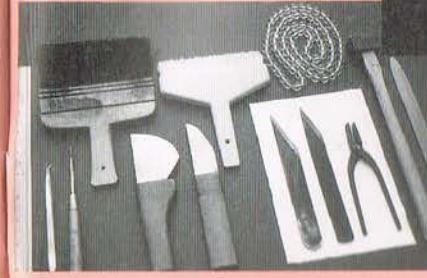
稀少な、抜群の腕を持つ自立て職人、開発さんの名はあちこちで聞いた。
今回の取材後、開発さんが大往生ながら亡くなられたことが、
手仕事のネットワークにどんな波紋を起こすのかと胸が痛む。

「職人」は今、確かに静かなアームとなりはじめてはいるけれど、
後継者がない、あるいは育てたがらない職人さんも少なくないことを知った。

そんな現実は、
「人」を通して、日本が長い年月受け継いできた伝統の技を、
ストップさせてしまうかもしれない恐ろしさをはらむ。
場合によっては一度と取り戻せないかもしれないのに。

昨今職人が育たない理由は、金は出しても口を出さない日那衆かいないこと…
そんな話も数多く聞いたが、
時代が変わつて日那がいなくななり、
徒弟制度が時代に合わなくなり…
それなら今の時代なりの職人の育て方があつてもいいのではないかどうか。
私たちの、日本の暮らしの中に、いて欲しい人たちではないだろうか。
消費者としての私たち一人一人も考えるべきことだろうし、
さらにまた、マイスター制度などさまざまなしくみを通して、
ドイツやフランスが職人育成に成功しているのなら、
日本でもできるのではないかどうか。

千住は日本の中の小さなエリアだけれど、
その中にも、これから紹介する、
数々の手仕事が継承されています。
普段は見られない工房の中を、
そつと拝見させてもらいましょう。



刺繡師の

手業が 引き出す 絹糸の輝き



江戸刺繡師 竹内政治さん

江戸刺繡の伝統を今に伝える竹内さんの仕事場を見た。自宅の二階の十六畳ほどの和室に刺繡台が四台並んでいた。障子を通して陽光はやわらかく部屋全体がすみずみまで明るい。糸箪笥、糸巻器、アイロンなど、一つひとつ道具が骨董品のようなたたずまいで竹内さんの来し方を語っている。

刺繡台の前に正座する竹内さん。六十年來の慣れた姿勢だそうだ。制作中の生地は留袖である。白の繡糸を手に取るとスイツと切つて針に通す。七十をとおに越えているが眼鏡は知らない。挟んだ指に隠れるほど短い針が布を通る。

職人として生きる

江戸刺繡は、ほかしが少なく配色や色合いが濃い目というのが特色だそうだ。しかし技術だけでなく、色の組み合わせなどは刺し手のセンスによるのは言うまでもない。竹内さんの作品は美しさの中にも上品な配色が特徴だ。皇后陛下が訪仏されるために挑えられたドレスの刺繡



↑糸を口で引っぱり燃る一瞬

→奥さんが包みをほどいた。中から見事な裾模様が顔を出す。紅い縫い紋の白い留袖。お嬢さんが嫁ぐときに持たせたものだそうだ。裾は地も見えないほど一面に刺繡されとろりと重い。二十年以上も前の糸が、褪せもせずつやつやと輝いている。美術品の風格である。

(取材／文H・写真M)

も竹内さん独特の気品ある落ち着いた配色だつた。

洋装が日常着になつた日本人には、手刺繡の施された和服は高値の花だ。どんなに持ち上げられても、自分は作家ではなく職人だという竹内さんの眞面目で控えめな姿は華やかな着物と対照的に感じられた。

D A T A
たけうち まさじ
東京都伝統工芸士
大正9年2月21日生まれ
〒120-0037 千住河原町8-1
03-3881-6272

15歳で2歳年上の兄弟子を追つて秋田から上京するまでは、刺繡など見たこともなかつた。厳しい徒弟制度が成り立つていた時代。住み込んだ先、千住の竹内家は大勢の弟子がひしめいて寝食をともにしていた。飯時はお櫃が行き来するレールがあつたといふほどにぎ

くない。生活がなかなか成り立たない商売ですから」と、今はどうしても習いたいといふ人に教えてくるくらいだ。江戸刺繡の良さが少しでも誰かに伝わっていけばという思いからである。



針先は迷わず一度入り一度で出る。白なのに真珠のようにつややかな絹糸が、スルスル消えたり出たりしながら模様を描き出す。意外に糸は短いんですねと思わずつぶやくと「下手の長糸といってね」と静かに受ける。見とれるうちに模様にふつくらとした糸目のつやがそろって光る。糸の擦り方、針の使い方、ひきかた、いつたいどこにコツが隠されているのか、人によって出来上がりのつやが違う。糸とさばく手の皮膚の相性なのか、竹内さんにもわからないそうだ。

やかだつた。
好きでも嫌いでもなかつた仕事も馴染むほどに好きになつた。「早く一人前になりたい」。その強い気持ちが仕事に打ち込まれ、仲間のように遊ぶこともしなかつた。
順調に仕事を覚えたころ不幸にして戦争があり、抑留先から足の怪我を負つて帰国したのは終戦後2年も経つた夏である。仕事に戻ると腕と真面目さを見込まれ、24年に親方のお嬢さんと結婚。29歳だつた。それからは病気がちの親方に代わつて、針を手に、弟子たちを育てた。

しかし八人にのれんわけした後、弟子をとることとは辞めた。「和服が高価なものになつてしまつたのに、手間賃はそう高くない。生活がなかなか成り立たない商売ですから」と、今はどうしても習いたいといふ人に教えてくるくらいだ。江戸刺繡の良さが少しでも誰かに伝わっていけばという思いからである。

江戸刺繡の 美しさを

次世代に

江戸刺繡師 竹内功さん

「仕事が好きですかと聞かれたら、以前は好きではないと答えていました。今は、嫌いではない、が答えです」もの静かな功さんは、にこやかに話してくださいました。しかし、お話しするうちに、仕事をしていないと体がおかしくなるという言葉を聞き、プロに向かつて「好きですか」という質問は適切ではなかつたと反省させられる。

左手を下、右手を上に、親指と人指し指で下からの針をとつてするつと滑らかにひっくり返し、今度は中指と親指で生地に刺す。リズムよくさらさらと



↑着物、刺繡をさまざまにインテリアへ転用することにトライアルされている



←刺繡教室は奥様のご実家（入谷）で、月2回開かれている。和気あいあいと楽しそうななかに、光る才能を見いだすことが喜びだそうだ

針が進んで行く。難しい点をお聞きすると、来る仕事はみんな違うから、新しい仕事が来ると勉強ですよとのことであった。功さんが、自分で刺繡した名古屋帯を見せていただいた。亀甲など、かちつとした幾何学的な古典柄を今風にアレンジした刺繡は、シックで柔らかな色合いで、シンプルながらさりげない粋を感じさせ、日頃着物には縁のない我々にも、着てみたくなる魅力を感じさせる一品だった。素敵ですねと言うと奥様の知賀代さんが、「刺繡の色に性格があらわれると思うんです。頑固で来ていただけでも仕上げた名古屋帯。古典柄をアレンジして、新しい感覚に仕上げついてステキだ」とおっしゃった。

実は奥様、刺繡がやりたくて京都の刺繡店に弟子入りしたこともある行動派。その後実家に近い竹内家の存在を知り、勤めるようになつて、功さんと知り合つた。結婚後も刺繡を続け、功さんを支える実力派だ。「日本のすばらしい伝統を後世に

(東京)を産地とするものを江戸刺繡と呼ぶ。

その江戸刺繡の伝統と技が、千住には息づく。昭和6年より、千住河原町で刺繡店を営んだ竹内平さんに師事し、数多くいた弟子たちの中からご長女の婿となって跡を継いだ竹内政治さんは、現在江戸刺繡の世界の第一人者だ。その政治さんがご結婚なさった当時、幼子だった功さんも、義兄を師匠としてこの道に入り、一昨年52歳の若さで伝統工芸士の認定を受けた。

新しい時代の職人、前進する職人の姿を千住に見た気がして、誇らしく感じた。

おきたい、と意欲的だ。

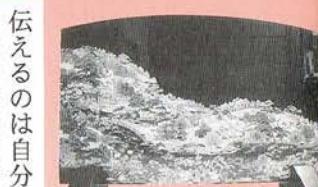
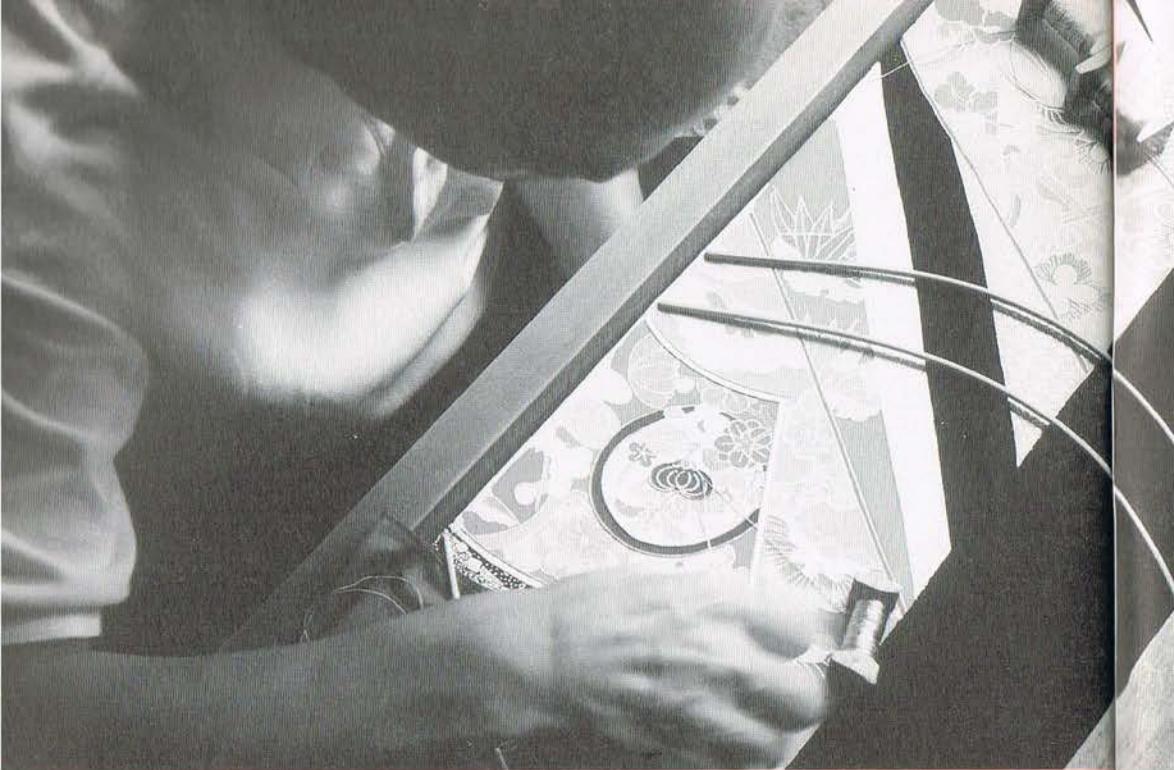
新しい時代の職人、前進する職人の姿を千住に見た気がして、誇らしく感じた。

(取材／文F・写真T)

D A T A
たけうち いさお
東京都伝統工芸士
昭和19年10月7日生まれ
〒120-0043千住宮元町17-18
03-3881-3148

千住の江戸刺繡

日本の刺繡は現存するもので飛鳥時代にさかのぼり、以降序々に発展を遂げるが、絹糸で縫うこと、また染めや絞りに併用されるという点で他国の刺繡と異なる独自の文化を育ててきた。さまざまな職人の手を経て染め上がった生地が、最後に刺繡で彩られ仕上げられる。どこに糸を入れるか、どの色を入れるかは刺繡師の裁量だ。アンカーとしての日本刺繡。技法的には東京も京都も同じだが、柄や特に色合いに微妙な違いがあり、特に江戸



↑着物、刺繡をさまざまにインテリアへ転用することにトライアルされている



↑部屋は明るく、手元まで自然光がとどく。98年秋、プロ野球チャンピオンフラッグを制作中

→手前が一幸さん。右側が跡継ぎの貴幸さん



若乃花の
巻乃花の

土俵へりは 千住の針 が支える

刺繡師 橋本一幸さん

おじやました日、橋本さんは鎖骨を折られ具合の悪いなか取材に応じてくださった。しかし、お話を、それを忘れててしまうほど、パワフルな力強さを感じさせる方だった。自然光がいっぱいにさし込む明るい畳の部屋で、跡取りの息子さんはじめ女性の職人さんが刺繡台に向かって針を動かしている。穏やかでやさしい空気の中に、熱気と活気があふれていた。

「若乃花が横綱になつたときは、化粧まわしを39本（13組）作りました。6月半ばからかかつて、仕上げたのが8月28日。9月1日、ニューオータ二で横綱昇進披露があつて一同に展示しました」

大仕事を終えたばかりだが、すでにプロ野球のチャンピオンフラッグに取りかかっておられ、息つく暇もない。この他、学校の校旗や、また大葬の礼の日像旗、月像旗、即位の礼の萬歳旗などにも取り組んだ。厚い生地、大きなサイズのものばかりだが、機械は一切使わない。この仕事を覚えるには何年かかりますかと聞いてみた。

「ひととおり縫い方を覚えるだけならそ程度はかかりませんが、化粧まわしなどは毎回図案が違いますから、ここでもういいというものはないのであります。毎回毎回勉強です」

伝統とは革新であるとおっしゃる橋本さんは、工夫を重ね「筆なり」という技法をあみだした。「まわしの図柄でも猿山さんが描いた文字は威勢があるでしょ。そういった書き文字の威勢、かすれを実際に描いたように見せる刺繡技法なんですね」

化粧まわしは約250年前から作られているといわれるが、今のような刺繡のたっぷり入った豪華なものが出来はじめるのは明治の頃。以降、図柄、デザインは年々変わるものだ。

橋本一幸さんは、亀戸で始めた父親から2代目。歌舞伎の衣装などを縫い、特に仕立ての腕がすばらしかった父だが、父親のもとにとどまるだけでなく、23歳のときからあちこちの刺繡屋で修業を重ね、30歳を前に独立。独立して初めて作った化粧まわしは春日野前理事長（元柳錦）引退直前のものだった。そして昭和42年、千住に店を構えた

という。昔の技術を丁寧に踏襲するばかりでなく、さらに高め深めていく……。そんな新しい匠の姿を見た気がした。

（取材／文F・写真T）

D A T A

はしもと かずゆき
昭和6年10月2日生まれ
屋号／橋本刺繡店
〒120-0033千住寿町15-12
03・3881・4131

日本だけに残る

『遊び心』の 伝統文化

紋章上絵師 長谷川孝昭さん

長谷川さんの仕事場におじやまして最初に見せていただいたのが「紋帳」だった。何度もめぐられ、懐かしい黄ばみが見られるこの分厚い紋帳には何千個もの紋が描かれているが、現存する日本の紋の数は2万を下らないそうだ。その、オシャレでアイデアたっぷりの紋の数々に思わず目が釘付けになってしまった。こんなところに、新しいデザインのアイデアがあつたとは…。

実はどの家にも紋があるという国は世界中を捜しても日本だけだという。花や鳥、草木や蝶、龍などが、奇想天外な発想で簡素化され、デフォルメされ、優雅な形に造形化されて小さな紋のなかに収る。平安時代に公家の牛車や衣服などに描か

→紋を入れる前に、熱した丸ゴテで押さえて生地をならす。

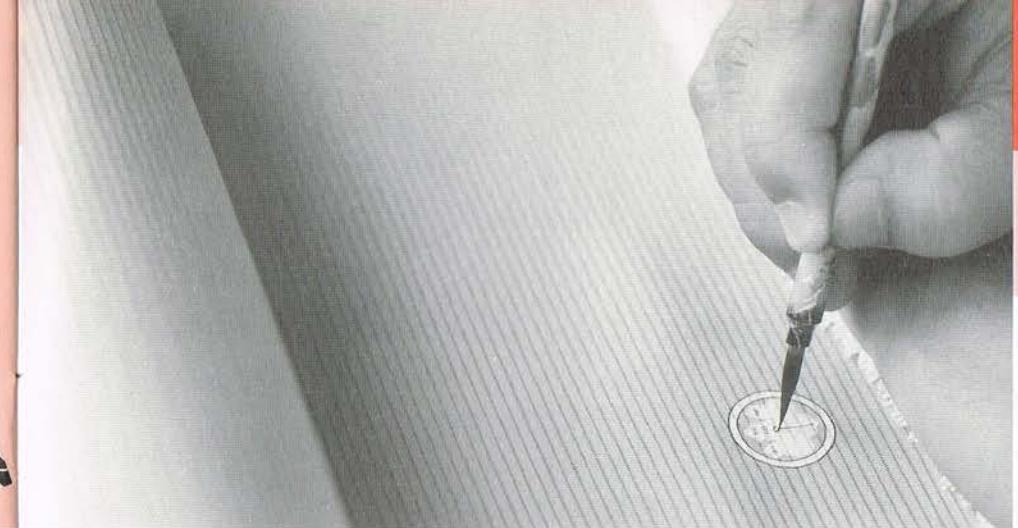
↓何千という紋が描かれた紋帳の1ページ。1つのモチーフで多彩に発想の拡がる様子がわかる。



最初に、紋の形に生地の色を白く抜くため、抜き剤を塗ってから蒸気にあてる

始めた「紋」の文化は、武家の旗や幟の印としても採用されるようになり、やがて商家で用いられ、そして天下泰平の江戸時代、高い美的感覚を持ち始めた町人たちにも愛用されるようになり、デザインも多様化していった。

「すごい文化だと思いますよ。遊び心のない人には考え付かないよね。当時の日本の文化度の高さを感じますね」紋を描き続けて30数年の長谷川さんは、「紋」という日本の伝統文化をこよなく愛する。



に動き出す。高級呉服を前にフリーーハンドで臨む長谷川さん、静かに動く筆先に息をのみながら、細い線が何本も入る葉脈など、間隔に間違いはないのか、太さはどう心配する素人の質問に、「一番難しいのは型彫。紋は型彫が命なんだよね。」と話していく。型がきれいに彫れていないと、

いくら線をきれいに描いても紋が垢抜けないのだという。
「型がきれいだと中に描き入れる線も自然とうまく入るんです」

戦前千住2丁目で染め物店を営んでいた父から勧められてついた『紋屋』のしごと。その当時、つまり昭和30~40年代から見ると着物の需要は減り、「紋屋」のしごとも減少気味。その中では着物需要の減らない歌舞伎役者や漁家の紋を手掛けることも少なくない。「この素晴らしい文化をなんとか伝承したいと思いますが、きっと今が正念場ですね」と奥様。最近は、ネクタイやバッグ、草履などにも紋を入れたり、真っ赤な振袖に龍の紋というように、自分の家紋にこだわらず、デザインとして好きな紋を使う若い人たちも出てきた。紋章上絵師たちが日々引き継いできた紋の文化が、「個」を重んじ始めた現代にまた花開くのではと感じるとともに期待したい。

(取材/文F・写真M)

D A T A
はせがわ たかあき
昭和18年8月20日生まれ
屋号/紋 昭
〒120-0044千住緑町2-6-28
03・3882・0348

着る人のからだを

思い描き、

ひと針ひと針

仕立てる



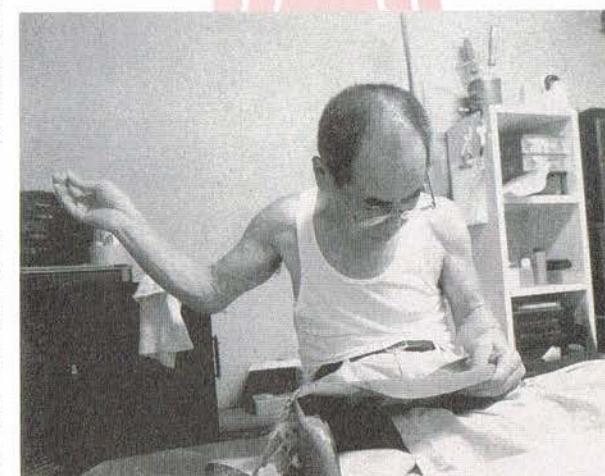
仕立て職人 高杉宗宏さん

「寸法を聞くと、体型がわかるんです。着る方の体型を思い描きながら、そのからだにピタッと収まるように仕立てていく。ですから、お客様の手元に納まつて、はじめて仕事が終わつたと思えるんです」高杉さんは、そう言つた。

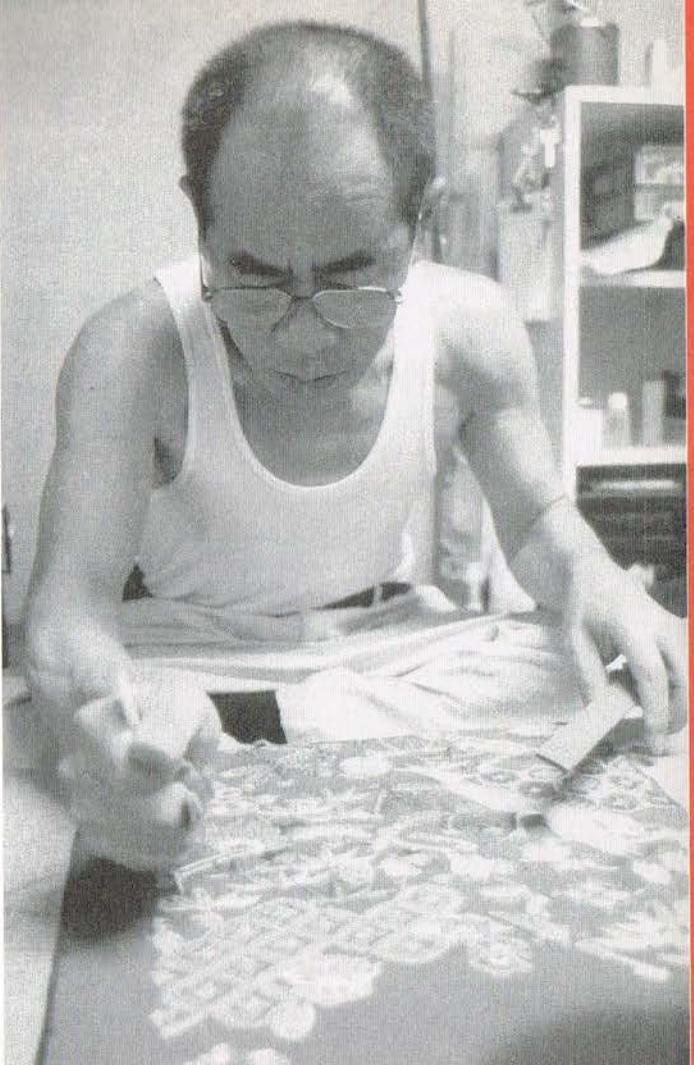
では逆に、女性を見ると寸法がわかれますかと聞くと、手元の針に落としていた目をチラとあげ、「わかりますよ。あなたの寸法も言えますよ。ついでに体重もね」と一刀両断。こちらが赤面してしまう。女性を見る目が仕事人の重みがあつた。

「ひと針ひと針縫うものですから、ひと針曲がれば生地に出来ます」「納めるのが惜しいくらいよくできたと思う仕事にはケチがつく。相手のからだを思つて継ぎは継げる」「仕事はめくらの方

目である。仕立ては着物を作る長い工程の最後。着る人にもつとも近いところにいる職人なのだ。今では呉服店の信頼も高く、弟子を取つても毎夜11時まで働き続けるほど仕事をこなす高杉さんも、修業時代は苦労の連続だった。初代の父は何も言わず、何も教えず、父から届くのはいきなり空中を飛ぶもののさしだけだったそうだ。「仕事やつてるとときは親じやなかつたですね」裁ちやへらつけなど、やらせてもらえない大事な仕事は親の仕事を盗み見てノートにつけた。



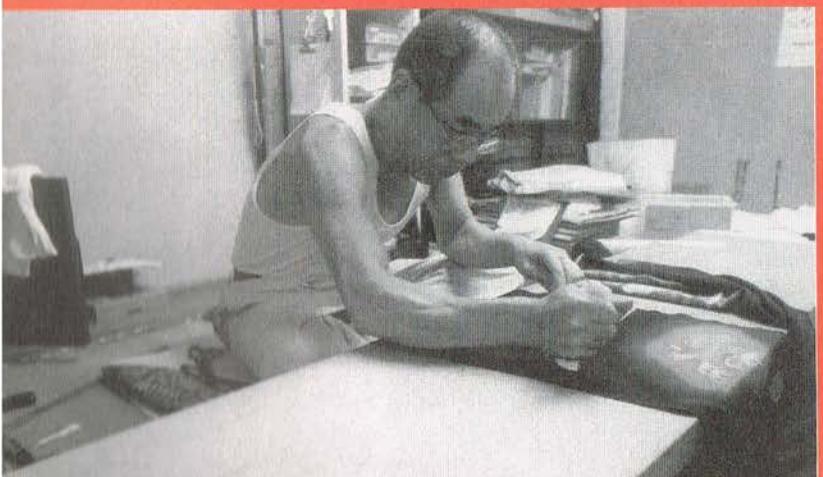
左の足の指で生地をつかみ、自在に動かし縫い進める



ようになつた今、高杉さんは言う。「人に教わつたものは浅いんです。自分で学び取つたものは奥深い」その言葉に重みがあつた。

「ひと針ひと針縫うものですから、ひと針曲がれば生地に出来ます」「納めるのが惜しいくらいよくできたと思う仕事にはケチがつく。相手のからだを思つて継ぎは継げる」「仕事はめくらの方

(取材／文下・写真K)



DATA
たかすぎ むねひろ
昭和18年8月10日生まれ
〒120-0041千住元町29-1
03・3882・6364

超一流の仕事人が語る

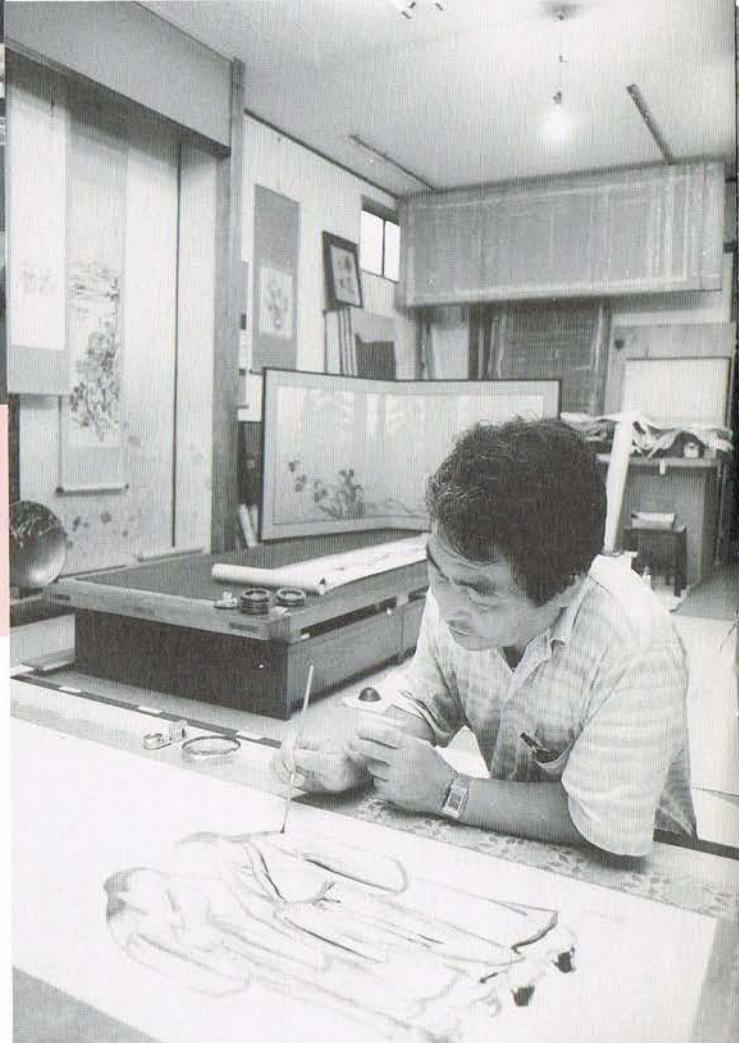
「経師ほど おもしろい 仕事はない」

経師（表具師） 小野滋嗣さん

書画の表装をしたり、ふすま、屏風などを貼るのが経師の仕事。小野さんは、皇居の仕事もこなす腕のいい経師だった父のもとで、年配の職人さんに囲まれて育ち、中学を出てごく自然にこの道に入った。絵に囲まれ育ち、そして手にするうちに、次第に愛着が深まっていったという。絵を見る小野さんの目は優しい。

そんな小野さんに、1992年、スペインのセビリア万博日本館の仕事の依頼が来た。幻の名城といわれる安土城の天守閣を再現する壮大な計画に、あらゆるジャンルの第一人たちが集められた。ふすま絵

「経師つていうのは、絵描きさんの描いた芸術品を、濡らしたりたいたたりしながら絵に向かう仕事。たとえば木村武山なんてのは、気づかないようなどころに鳥を描いたり虫を描いたり、そういうことをちよいつとやるのが好きなんだ。だから俺もこの武山つて人が好きなんだ。遊び心があるんだね。：そんなことを言いながら仕事する、こんなおもしろい商売はない、子供の頃から思っていたんだ」



セビリア万博日本館の豪華な安土城天守閣

打ち合わせから3年間を費やし、現地へ納めて半年後、「10月20日頃だったかな。無事に終わりましたって電話が入った途端に体調ががたがたと崩れちゃつて。医者通いしちゃつたよ」という。いくら計算してみても、風土の違う国で、紙や木がどう収縮し変化するのかわからぬ。表具師の仕事は、「貼れば終わる」というものではないのだ。

小野家はもともと、絢爛を極めた吉原の経師だった。わかっているだけで滋嗣さんから5代はさかのぼるという。千住柳町に遊廓ができる大正期、滋嗣さんのお父さんが千住へ店を移し、柳町遊廓内

の仕事も始めた。父の仕事は艶っぽかつたと小野さんは言う。「山の手風の硬い感じももちろんやが、やわらかい、色っぽいものを作るのが上手でね。上野の松坂屋で、金持ちの外国人が日本の高級な丸帯を買つて帰るときに、それを屏風に仕立てて持つて帰りたいっていうわけ。すると、建てた屏風一枚の中で、帯をひつくり返し、ひっくり返し、くるくるつとほどいていくて、最後の一巻きにあたかも女性がいるんじやないかと思わせるようなものを作る。あれは色街で育つた人間じやなきやできないね」：家風呂があつても着流しに半纏を着て銭湯に行く、粋な父親の作風が小野さんのからだの中に今もある。

いい仕事をしていれば自ずと仕事は来るという。弟子たちを育て、まだ小学生の息子さんは自分が育つてきたような環境を与えて、小野さんの卓越した職人技が昔ながらに継承されていく様を目の当たりにし、安堵のようなものを感じた。

（取材／文F・写真M）

↑裏打ち（美術品に裏紙を貼る工程）は手早さもポイントだ
→橋本雅邦の絵を修復中。しみぬきについては、古来のやり方では手間がかかりすぎると感じていた小野さん、研究に研究を重ね25年かけて独自のしみぬき剤を開発してしまった！京都の材料屋さんを通じて商品化し、現在は全国の経師たちが使用している。

DATA

おの しげじ
東京都伝統工芸士
屋号／（株）小野表具店
〒120-0031千住大川町18-10
03・3882・1439

や屏風などは、金色燐然たる桃山絵画が

平山郁夫画伯らによつて再現され、その表装を小野さんが引き受けた。扱う絵自体の価値が高く、差し替えのきかないものであるほど、表具師に失敗は許されない。画家が絵を描けるよう紙を用意し仮貼りする下準備から、描かれた絵を屏風やふすまにする仕上げまで、親の代から話と技術を受け継ぎ、自分たちも何度も経験を積んでいないとできる仕事ではない。

12

13

腕を磨き、 道具を洗練させて 生まれる技と粋

道具職人 和田信郎さん



「夏は汗で道具が錆びるのであまり好きじゃない」と言う和田さんの頭には汗拭き用の手ぬぐいの鉢巻きがキリリと巻き付けられている。汗は木に染みを作るので大敵なのだ。足もとは脱ぎ履きしやすいようセッタ。その姿には貴様がありカッコイイと思えるのだが、当の和田さん自身は気に入っていないようだ。「カッコ悪くても、いい仕事をするには仕方がない」と言って笑う。

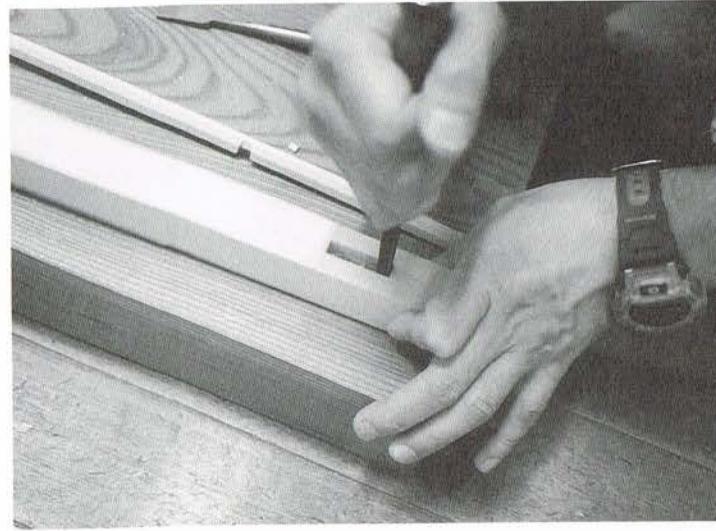
「夏は汗で道具が錆びるのであまり好きじゃない」と言う和田さんの頭には汗拭き用の手ぬぐいの鉢巻きがキリリと巻き付けられている。汗は木に染みを作るので大敵なのだ。足もとは脱ぎ履きしやすいようセッタ。その姿には貴様がありカッコイイと思えるのだが、当の和田さん自身は気に入っていないようだ。「カッコ悪くても、いい仕事をするには仕方がない」と言って笑う。

「夏は汗で道具が錆びるのであまり好きじゃない」と言う和田さんの頭には汗拭き用の手ぬぐいの鉢巻きがキリリと巻き付けられている。汗は木に染みを作るので大敵なのだ。足もとは脱ぎ履きしやすいようセッタ。その姿には貴様がありカッコイイと思えるのだが、当の和田さん自身は気に入っていないようだ。「カッコ悪くても、いい仕事をするには仕方がない」と言って笑う。

「木は怖い。上下を見て、上は上、下は下に使うんだ。南は南に面して使う方がよい。その方が確かに木。しかしそれでも狂う。木を買ってくると本来なら3年は寝かす。それから作って納めて3年くらいする。とまた狂うので、さらに削つて、それでようやくでき上がり。」

和田さんは明治時代から続く道具職人の4代目。道具とは障子や木戸など家の中でも動かして部屋を仕切るもの。仕事場には木肌もつややかな木材が立ち並び、ヒノキやヒバの心地よい香りに包まれる部屋のなかでインタビューアさせていただいた。

「小さいころから父の仕事を見ていた」ことが大きな財産となつたと言う和田さん。中学を出てすぐこの仕事をついたが、実は26歳のときに師匠でもあるお父さんを亡くしている。学ぶべき



道具職人のデザインは住人の好みやどんな部屋を使うのかによって千差万別。決まつた型などない。作るもののが幅広ければ、その道具の種類も必然的に数多い。ノミやカンナなどの基本的な道具には何十ものバリエーションがある。冒頭で材料の木が狂うという話題に触れたが、カンナも3年くらいは台が狂うそうだし、どの道具も自分に合うように長さや持ち手を調整したり洗練させてきたものばかり。なかには先代が考案出した道具、和田さん自身のアイディアで工夫を加えた道具もある。「これも今の形にな

な仕事を数多くこなすことで腕が向上することもあるという。どこまでも、奥が深い。

幾多の経験を積み重ね育てた腕前は人間ワザとは思えない精密さだ。例えば、カンナの技術。なんと、3／100mmの薄さで削ることができる。削りクズは薄く透き通り、まるで天女の羽衣のよう。

そんな和田さんが今、のめり込んでいるのは器。気に入った器は魯山人だろうと何だろうととことん使うというのが和田さん流の道具との付き合い方。居酒屋に自分の器を持って行って、それでお酒を飲むこともあると言う。決して自慢するわけではない。自分が美味しいと感じるわけではない。自分が美味しく飲めばいいのだ。わかる人だけがわかればいい。「それが粋ってもんじよ。」

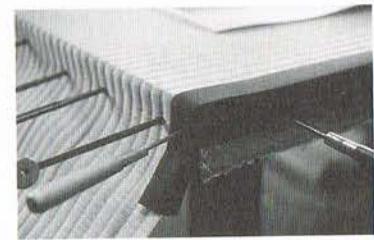
粋であること、それが仕事哲学でもある。学ぶ姿勢を崩さず、こだわりを大切にし、いい仕事をする。そんなカッコいい『粋』に触れた数時間だった。

(取材・文/A&S、写真S)

D A T A
わだ のぶお
昭和27年1月13日生まれ
屋号／建基
〒120-0034千住5-3-10
03・3881・0038

よさは 寸法具合 に始まる

置職人
花井克俊さん



できるが、調子を見ながら調整はできない。手縫いは裏と縁の調子を見ながら縫つていたが、作業効率は圧倒的に機械がいいので9年前に機械も入れた。金額により手仕事の分量が異なるわけだが、花井さんのところでは、要点は手仕上げで仕上げている。

D A T A
昭和30年1月14日生まれ
屋号／(有)花井畳店
〒120-0035千住中居町17-15
03-3888-7751

開け放されたガラスの引き戸、その奥に置かれた畳、束になつた畳の切り落とし、太い縫い針に麻糸を通して力こぶで奮闘する男姿、風鈴にそよぐ風……。はるか昔の記憶とほとんど変わりない懐かしくも美しい風景が繰り広げられる。そもそものはず、花井畳店は大正時代に千住で店を開いた先々代から数えて3代目。日光街道（4号線）に面した今の場所に移つてからでも50年以上経つ。職人衆取材を進めるうち、別の腕のいい職人衆から紹介を受けたのが花井さんだつた。この日花井さんは、備後の畳表に黒無地の畳縁という高級畳を手縫いで縫い合せておられた。

「機械は均等に力がかかつてきれいに

畳には完全な規格品ではなく、部屋の大きさにあわせて作るもの。厳密に言うと、一つの部屋で完全に真四角な畳は中央部の畳だけで、それ以外は部屋の状態にあわせて変形している。それをどう吸収して畳をつくり、敷き込むか、この辺りは微妙な経験が物を言う。畠職といえれば、店先の台上で畳に向き合う姿ばかりが印象的だが、実は建物の寸法を計ることも非常に重要な仕事なのだ。「勘もあるしね。かねあいだね」：

現在、男女ひとつで女の子2人を子育て

しても、4時からでも畳一枚でも縫わないと、何か落ちつかないのだそうだ。



によって、あるいは木の枯れ具合かもしれないが、にじむこともあります。にじむときは膠を少し強めにしたり……

ここでも昔ながらの手法が踏襲されているようだ。しかし逆に、材料の方が廃番になり手をうたなければならないことがある。たとえば今度泥絵の具の緑色がなくなるという。また経木を縁に打ちつける極小の釘があるとき急になくなつた。「釘屋さんだつて、売れるものしか作らないでしょ」と兆子さんがおっしゃるとおり、小さな釘は、昔は小さな物だから」と教えていただけなかつたが、木工品も多く需要があつたが、今は少ない。いろいろ検して、千住の町工場で作つてもらえるところを見つけたが、工場は「私の大事な宝

いう。ひとひとつ素材を静かに守り続けておられる兆子さんの愛情が、ふわり、伝わつてくるようだつた。

（取材・文／A&F・写真K）



東京にただ一軒残る手描きの絵馬屋さんが千住にある。江戸時代から代々吉田家に伝わる愛敬のある図柄は、平成の今日、かえて非常に斬新でさえある。また特徴ある色づかい、木を薄く削つた経木を材料とする絵馬といふ点、いずれをとっても独特の千住絵馬だが、現在8代目の吉田兆子さんに受け継がれられている。7代目吉田政造さんが、働き盛りの65歳で亡くなつたとき、4人姉妹の長女

胡粉を地塗りに使い、天然膠を温め泥絵の具と合わせて乳鉢ですり、材料も道具も自分で手作りで続けている。古来の材料である泥絵の具や墨は経木のような素材に描くのにむずかしくないのかと聞いてみた。

「木そのものが生きているものだから、面

D A T A

よしだ ちょうこ

4月1日生まれ

屋号／絵馬屋

〒120-0034千住4-15-8
03-3881-4505

だんだん畠職が性に合ってきた気がする。だんだん畠職が性に合ってきた気がする。と話す花井さんの目に力強さを感じた。

（取材・文／A&F・写真S）

東京にただ一軒の 手描き絵馬屋、 ただ一人の女絵馬職

絵馬職 吉田兆子さん



兆子さんは30代だった。子供のころから父のそばにいて、自分ができるのことを手伝うのが好きだつた。

「父はもう、自分一代で終わらせてると思つたからね。今ごろ絵馬屋なんてやつてると思つてないでしょ。女性ながら、跡を継いだそのわけは？」と聞くと、何か惹かれるものがあつたんじゃないですかね？

と自然体な答えが返つてきた。お父様を尊敬されてたんでしょうね、と聞くと、「かもしれませんねえ。意識下でね……」とゆつくりうなずいた。



「女性ながら、跡を継いだそのわけは？」と聞くと、何か惹かれるものがあつたんじゃないですかね？

かれるものがあつたんじゃないですかね？

お父様を尊敬されてたんでしょうね、と聞くと、「かもしれませんねえ。意識下でね……」とゆつくりうなずいた。

（取材・文／A&F・写真K）

D A T A

よしだ ちょうこ

4月1日生まれ

屋号／絵馬屋

〒120-0034千住4-15-8
03-3881-4505



昭和34年、10月

↑天皇陛下ご成婚のときのお馬車

では、北川さんが上から針を通して、奥様が下へもぐつてねいた。

特に印象に残る仕事を聞くと、昭和から平成に変わったときの「お馬車」の仕事をあげてくださった。古い見本をもらつてこれまでに経験のない馬具をいろいろ作つた。幾重にも重ねた牛皮を縫う場面では、北川さんが上から針を通して、奥様が下へもぐつてねいた。

「役所」とは「宮内庁」のこと。宮内庁の馬も、目の不自由な方の盲導犬も、北川さんにとっては同じお客様なのだ

具作りはいつも2人3脚なのだそうだ。裁断から仕上げまで、明治時代から変わらぬ技法、すべてを「手」で作り上げる北川さんの馬具は、非常に丈夫で、しかも温かみがある。口数も多くなく、もの静かな北川さんと話していると、けがれない少年のようなやさしさが伝わってきていが、心が洗われるような気がするが、いつたん針を握ると、その力強い集中力、革に向かう一途さに圧倒され、素人ながらにこの人の仕事は信用できると確信させられる。

このところ、海外の要人が来られたとき、東京駅から馬車を出すことが増え、「役所」の仕事は増えているのだという。一方、北川さんは70歳を超え、仕事は多く受けられなくなつた。子供は2人とも女の子で嫁に行き、後継者もない現状のなか、綿々と受け継がれてきたこの手業はどうなつてしまふのだろうと暗澹とした気持ちにさせられる。



D A T A

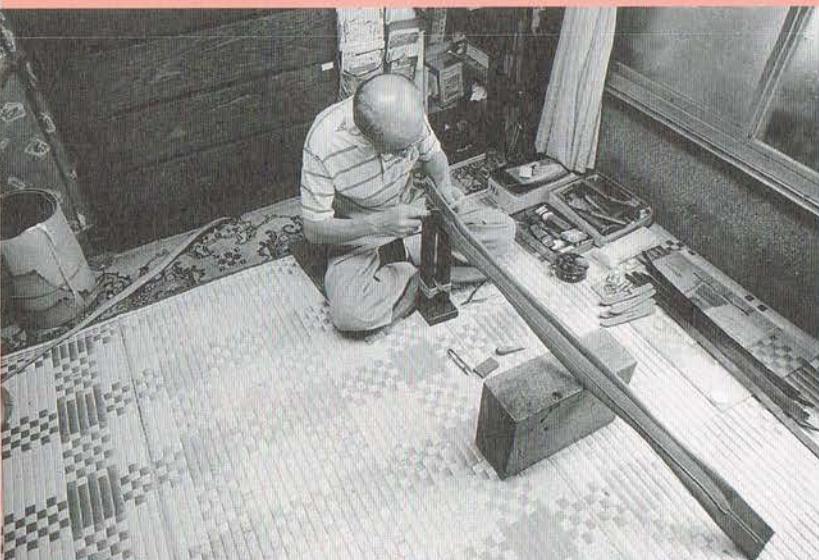
きたがわ	せいいち
大正11年9月20日生まれ	
屋号／北川商会	
〒120-0022 柳原2-44-12	03・3882・3833

(取材／文F・写真T)

宮内庁の馬具も一手に。

心やさしい職人気質

馬具職人 北川清一さん



騎ばさみと呼ばれる木製の台に裁断した多脂牛革をはさんで、2本の針を両側から通す「2本針」の技法。



「役所へ行くと、どれを見ても自分たちのした仕事ばかりで、こんなに仕事してきたんだなあと思います」と奥様のキヌさん。北川家では

昔、神田（現秋葉原）には、馬具屋が4-5軒あり、軍人や公爵、また農家の馬の馬具を作っていたそうだ。その中の一軒が、北川さんのおじいさんの店。震災で焼け出されて三ノ輪に移り、北川さんは15のとき

から家業を手伝い始めた。その後、本郷の叔父の馬具店で働き、千住に仕事場を移して完全に独立したのは昭和47年である。馬具の需要は変わってきたが、現在に至るまで変わらない宮内庁の馬具を、昔からのつながりで作り続ける。

ノコギリの“矢者”の実力

まず見立て、それから目立てる

ノコギリ目立て職人 開発久雄さん(故人)

絵になると言えばいいのだろうか。作業場の広さは2畳ほど。大工道具や左官道具を販売する小さな店舗の中でノコギリに向かう姿には、見る者をはっとさせ納得させる存在感と説得力がある。様々な色と形が秩序もなく取り巻いているというのに、まるで白黒映画のワンシーンのような美しさ。

ノコギリの目立てとは簡単に言えば、ノコギリがちゃんと切れるように、そのギザギザ(歯)の1つ1つまで仕上げていくことをいう。まず、歯をヤスリで削って研ぎなおす。次にノコギリの板面の歪みである「狂い」を取り除く。最後に歯の並び具合である「アサリ」を調整する。精細で微妙な作業の

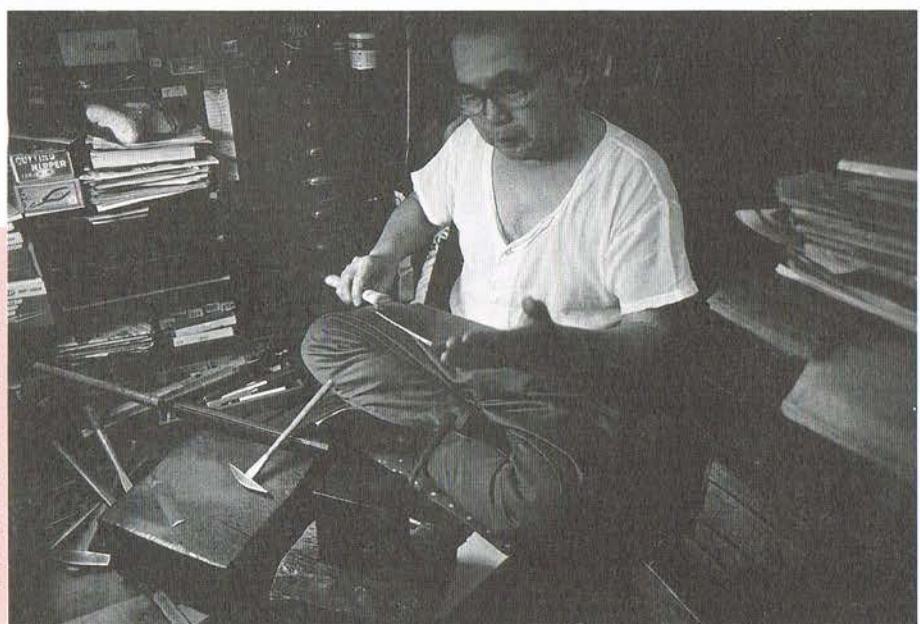
ノコギリの目立てとは簡単に言えば、ノコギリがちゃんと切れるように、そのギザギザ(歯)の1つ1つまで仕上げていくことをいう。まず、歯をヤスリで削って研ぎなおす。次にノコギリの板面の歪みである「狂い」を取り除く。最後に歯の並び具合である「アサリ」を調整する。精細で微妙な作業の



連続。今回の取材ではそのうち「アサリ」の調節を見せていただいた。

先のとがった金づちで、小さな歯を1本おきに1秒間に5本というスピードで叩いていく。次に裏返して叩かなかつた歯を叩く。金づちは2種類あり、それを使い分けて歯を曲げたり反らしたりする。歯の並び加減の調整は全て経験と勘によって生み出され、その動作は非常に速く、寸分の誤差もない。しかし、難しいのはむしろ「狂い」をどることなのだと言う。

「アサリを調整できるのは当り前。



昭和54年の開発さん。惚れ込んで写真を撮りに通ってきた人がいたそうだ。これはその人の置いていった写真

でも、目立て職人全員が『狂い』をとれるわけじゃない。」

それには医者のように「見立て」ができないではない。何が悪いのか、どこが狂っているのかを判断する豊富な経験と勘が不可欠なのだ。当然熟練が必要だが、何年やつてもできない人にはできないものなのだ

といふ。

開発さんは長野県の大工の家に生まれ、11歳のときにノコギリ鍛冶に奉公に出る。そして16歳ごろに東京で独立、自転車に目立ての道具を積んで、飛び込みで仕事をしたという。「兄ちゃん、そんなに若くて目立てができるのかい?」とあしらわれ、それでも「ひとつやらせてみるか」と言つてくれたお客様の目の前で真剣勝負を積み重ねていった。開発さんは「15~18歳ごろの苦労が財産となつた」と振り返る。

その後、戦争を経て、目立て職人として初代の店を千住に持つこととなつた。「ああいう腕のいい目立てはそういないよ」「開発さんが辞められたら、どこにノコギリを出したらいいのか困つてしまふ」と職人さんに頼りにされてきたが、平成10年9月末日をもつて店を閉店、しばらく目立てだけは続けておられたが、11月20日朝5時40分、直腸癌のため、静かに息を引き取られた。前日まで歩き回り、亡くなる数時間前に好物のイカ刺し、

1998年の開発さんとお店。まさに絵になる風情だった

中トロ、フグの一晩干しを食べ、家族にあたたかく包み込まれての見事な最期だつた。

閉店前には、ひつきりなしになじみのお客さんが店を訪ねてこられ、2言3言話していくかれた。多くの人々が開発さんの腕と人柄に惚れ込んでおられたのだろう、みなさん心から店じまいを惜しまれている様子がうかがえた。

軽快な金槌の音が響いていた作業場も今はもうない。開発さんが得た信用と存在感は、持つて生まれた資質とともに、苦労を乗り越え、こだわりを捨てずに打ち続けた、その天文学的回数の積み重ねが生み出したものだつたのかもしれない。

(取材/文S・写真K)
千住の町にすばらしい足跡を残していただいた開発久雄さん、心より御冥福をお祈りいたします。

(町雑誌千住編集部一同)

D A T A

かいはつ ひさお
大正11年9月4日生まれ
屋号/開発鋸店
〒120-0034千住3-20
(平成10年9月末日閉店)

生涯現役

全国のプロが 信頼する ヤスリの達人

ヤスリ目立て職人 神岡 啓さん

「退職金も厚生年金もないけど、70過ぎて
も仕事ができるのが幸せですね。」

神岡啓さんは2代目のヤスリ目立て職

人。14～15歳ごろから父親に習い始め、

すでに半世紀。広い道路に面した3畳ほ
どの作業場にはラジオの音が流れ、その
音をかき消すように通りを行き交う車の
轟音が飛び込んでくる。そこで1秒間に
2回、「キンキンキンキン」と規則正し

い金属音が鳴り響いている。

ヤスリの「目立て」とは細長い鋼の棒
や板に目（凸凹）を刻んでいくこと。大
男の握りこぶし大の頭部を持つマルトン
と呼ばれる金づちを使って、名刺大のタ

ガネという刃物を打ちつけていく。その
リズムは正確だ。1回マルトンを振り下
ろすごとに空中で小さく1拍取り、2拍
子で刻んでいく。

「目を立てられるタガネをちゃんと作るこ

とができる、初めて一人前といえるんだ

よ。」

微妙な仕事をこなす職人にとって、「道
具」は命である。

神岡さんの作るヤスリの5～6割は釣
りの和竿をつくる。竿師“が使う、プロ
のためのヤスリ。ヤスリは何をどのように
削るのかによって形や目が異なる。神
岡さんはほかにべつこう細工、



ときには人間ワザとは思えない精密さ
が要求されることもある。0.5mmおき、0.3
mmおき、さらには0.1mmおきに目を刻んで
欲しいという要望が来るというのだ。そ
れほどの細かい作業を、定規も使わず、
永年の経験と勘で正確にこなしていく。

多くの得意さんが
全国にいるが、いずれ
もつきあいは長く、
たとえば和歌山へは年
に一度、竿師を訪ねて
きた。「友達同志みたく

使う道具の数が多いが、大きく分けて、主に4種。①鋼を②金敷と
いう鉢物の台に乗せ、皮バンド（踏み皮）でぎれないように固定し、
③マルトンで④タガネを打ちつけていく。仕上げに焼き入れを行う。

なつちやいますね」と
言うが、そのなかで、
「こうすれば使いやす
い」といった声を詳細
に聞いて戻つては工夫
し、技術を高め、今日、
「和竿のヤスリは神岡」と言
われるまでに至った。
会社勤めならとつぐに定年を
迎えているはずの70代。しかし、
その飽くなき研究心に年令は関
係ないようだ。

「ヤスリというのは縁の下の
力持ちみたいなもので、お客さ
んにとつて使いやすいかどうか
が大切なんだよ。自分で満足し
たことはないなあ。」

職人になる条件はいろいろあ
るだろうが、向上心を持ちつづ
けることが生涯現役でいられる
秘訣に違いない。

（取材／文S・写真K）

DATA

かみおか ひろし
昭和2年7月14日生まれ
屋号／神岡ヤスリ製作所
〒120-0043千住桜木2-10-6
03・3888・3383



日本刀
切抜文様
井上喜古

職人の手には職人の人生が刻み込まれている。それは歴史や技術であつたり、思い入れや誇りであつたりする。「鍛打ち職人」保坂博さんの手もそんな何かを感じさせる手だ。

初代の保坂金太郎さんは博さんの祖父で、日本最初の「ラシャ切り鍛」を手掛けた「弥吉」の一番弟子。博さんはその4代目。ラシャ切り鍛とは洋服の普及に伴い、明治初期に渡来し、日本風につくられるようになつた布切り鍛のこと。当時は「火造り」といつて、材料の鋼と鉄を叩いて鍛の形を作るところから全て職人が手がけていた。

作業場は細い路地の奥にある。工場から仕入れた鍛の原型を、まず削つて整形したのち、焼きを入れて硬くし、研いで、組み立てるまで。これらを順に

自分の代ならではの新しい工夫もいくつか加えた。今では工場で作るようになった工程についても、使いやすい鍛にするために、先代達の経験が生み出した柄の型を取り、それをもとに工場で作つてもらつたり、ま

保坂さんは、

刃を研ぐ工程についても、企業秘密のことなので明かすことはできないが、効率よく配置されている。何段階もの工程の中では「焼き入れ」と「裏焼き」が難しいと保坂さんは言う。「焼き入れ」とは刃を炉の中に入れて加熱し、硬くすること。「裏焼き」とは鍛の刃の裏面を形を整えること。

こなせるよう、いくつもの機械が壁伝いに刃を見ると分かる。大きめの刃を見るところが、刃の裏は真っ平らではなく、少し凹み、ひねられている。刃の角度も大切だが、裏焼きによって凹みとひねりをつけることが切れ味には重要で、これこそが最も「神経を使う作業」なのだそうだ。

刃を研ぐ工程についても、企業秘密のことにしており、刃を研ぐ工程についても、企業秘密のことにしている。切れ味を求めて手先に伝わる感覚を大切にしているのだ。「お客様に、よく切れると言われるものが一番うれしい」と無口な保坂さんははにかんだ。

刃を研ぐ工程についても、企業秘密のことにしており、刃を研ぐ工程についても、企業秘密のことにしている。切れ味を求めて手先に伝わる感覚を大切にしているのだ。「お客様に、よく切れると言われるものが一番うれしい」と無口な保坂さんははにかんだ。

鍛打ち職人 保坂 博さん



職人の手が語る、手のじごと



20坪程度の作業場。「荒削り」「焼き入れ」「焼き戻し」「裏焼き」「研ぎ」「組み立て」…いくつもの工程を経て、鍛は完成に近づく。それを日々繰り返してきた時間の重みが、セピア色のあたたかな絵のような美しい空間を作り上げてきた

(取材／文S・写真K)

DATA	
ほさか	ひろし
昭和24年3月24日生まれ	
屋号／(有)兼吉製作所	
〒120-0033千住寿町18	
03・3881・6513	

Autumn Adventure 1998



■千住・町歩き

蔵のある風景を歩く■

荒居康明さん（町並み研究家・建築専門学校講師）の案内で、10月中旬の5日間にわたり、合計72名が、路地裏の蔵を見て歩く千住の町歩きに参加しました。

アンケートでは、「少年時代過ごした千住に、蔵がこんなにたくさんあるとは思ってみなかった」（70代男性）「日本のよさが残っている町千住」（40代女性）「暮らしている人がいきいきしている。東京にもこんな町があったのだなあ」（30代男性）「狭い路地が網の目のように通った町はとても人間の体温を感じられ懐かしい気がします」（50代男性）「この町に住みたいです」（20代女性）など、『発見』を楽しんだ声が多く、あらためて千住の魅力を感じていただけたようです。

↑写真右上に見える高札はメンバー手づくりのウォーカラリーのチェックポイント。現在も掲示されている。
→蔵の持ち主にお話を伺う。写真は横山家ご当主



■暮れ六つのまち幻燈会■

（イベント提供：スギナ組、田甫）

喫茶蔵のなか、神社などで懐かしい16ミリフィルムを上映するイベントを行いました。蔵の中、神社の境内などが、普段とは違った幻想的な雰囲気を見せてくれました。

→スギナ組提供の千住本氷川神社境内での上映
△蔵を利用した喫茶店、喫茶蔵で珈琲を飲みながら映画鑑賞。写真は田甫の御主人

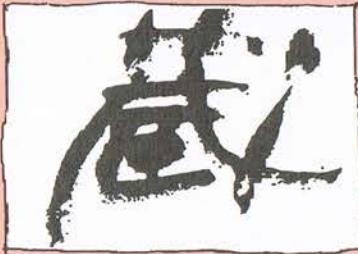


「千住・蔵の町」を実施しました！

10月17日（土）～11月30日（月）

宿場町だった千住には、路地のあちらこちらに約50棟の蔵が残り、今も倉庫や住居として使われています。

千住・町・元気・探険隊では、1998年秋、千住の蔵を知り、見て歩き、また町を楽しんでいただく催しを行い、多くの参加をいただきました。



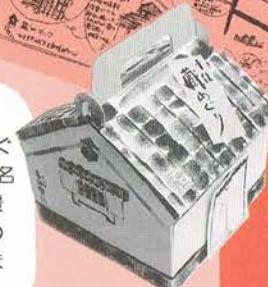
■千住・蔵の町展示会■

於千住宿歴史プチテラス&千住壁画の道ギャラリー
千住の町に残る蔵の歴史から現代までをパネルでご紹介しました。
スライド講演会も行いました。

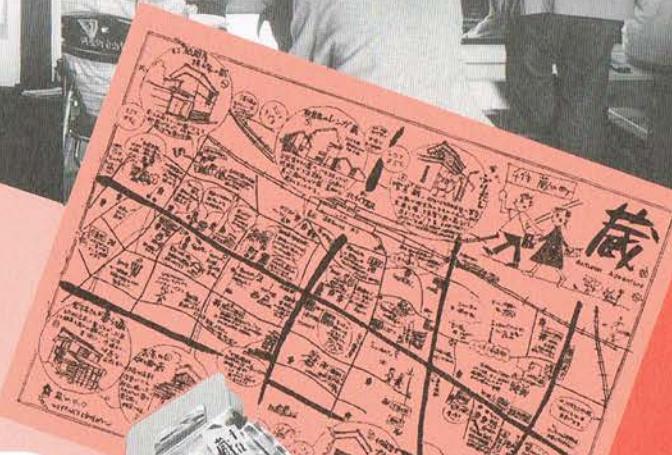


■千住・蔵ウォーカラリー■

「すごろくマップ」を手がかりに6カ所の蔵をめぐっていただくウォーカラリーを実施し、合計549名の皆さんにラリーを楽しんでいただきました。景品として、千住の喜田家さんから、ラリーにあわせて「千住蔵めぐり」を開発、ご提供いただきました。ご協力、本当にありがとうございました！



△ウォーカラリー台紙を兼ねた蔵マップ
△蔵の形をした「蔵めぐり」のパッケージ





千住界隈

せかせかと走り続けていないと不安になる街、それは東京。
少し肩の力を抜いて立ち止まってごらんよ。
東京は街の方から話しかけてくるから、街のささやきに耳を傾けながらのんびり歩いていると、この街はとても奥深く、いろいろな物語を垣間見せてくれる。
まるでシネマを見るように、そしてここに自分を見つけようと、私は今日もシャッターを押し続けるのです。

(写真・文 田村定也写真帖より)

そんな、いい時を重ねたいい顔を持つ店を、いっぱい発見できるのが千住の魅力。

仕事を大切にする人にしかなれないわざ。
残していくた注文に真剣に向き合う。
そうやつて1日1日積み重ねた何十年。
壁に、柱に、扉に、看板に…
降り積もった時間と人の息遣い。
時間だけにしかなれないわざ。

お客様が帰つたら、
1日を店で過ごし、大切に掃除して店を閉める。
ときどきお客さんがやつて来て、
主人と笑顔の時間をすこす。

小さな小さなかどの店。
細い細い路地のわき。
瓦の一枚一枚にまで、
店主の愛情が感じられる店。

千住
発見

町雑誌「千住」VOL 8 1999年3月発行

発行 千住・町・元気・探険隊 〒120-0044 足立区千住線町2-33-23 TEL03-3870-7055

編集 町雑誌千住編集室 〒120-0034 足立区千住3-52 TEL & FAX 03-5244-2158

編集人 大野順子 舟橋左斗子 (郵便振替口座) 00140-4-103836

STAFF 取材・原稿／荒居康明 川上佳子 斎藤和郎 稲原恵子 写真／川上佳子 熊谷永浩

斎藤和郎 館又将文 松本康一 写真特別協力／田村定也 イラスト／MOMO MAC協力／村田操

協力／新井勇治 板橋陽子 稲葉あや子 大江明俊 大野清士 大森美恵子 加藤義久 金子勇一

川口登紀子 鯨井博 鈴置ミホウ 柏和秀 中田江利 長野高志 原島陽子 柳瀬有志

渡辺源勝 山崎正樹